

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380935

研究課題名(和文)「継続する絆」における自伝的記憶の機能

研究課題名(英文)Continuing Bonds and the Functions of Autobiographical Memories

研究代表者

田上 恭子 (Tagami, Kyoko)

愛知県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：80361004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、故人を含む自伝的記憶が故人との継続する絆においてどのように機能しているかを明らかにすることを主たる目的とし、精神的健康、喪失体験の性質、継続する絆、故人を含む自伝的記憶の想起における主観的体験、及び故人の無意図的想起との関連について検討した。主な結果として、(1)精神的健康状態が良好な場合は必ずしも故人との絆が死別への適応を高めるわけではない可能性、(2)故人との絆には故人を含むエピソードのポジティブな感情を伴う想起が関連すること、(3)故人の無意図的想起頻度の高さは精神的健康状態の不良さと関連することが示された。今後故人の続柄別検討などさらに精緻な研究が必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study was to explore how autobiographical memories serve a function in continuing bonds with the deceased. The relationship among well-being, characteristics of one loss experience, continuing bonds, subjective experiences in remembering autobiographical memory of the deceased, and involuntary memories of the deceased was investigated. Main results indicated that (1) continuing bonds did not always facilitate the adjustment to the bereavement when well-being was better; (2) continuing bonds might relate to remembering autobiographical memory involving the deceased in positive mood states; and (3) the higher frequency of involuntary memories of the deceased was associate with the poorer well-being. Further elaborate research is needed to investigate continuing bonds and autobiographical memory, such as examining by family relationship to the deceased.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自伝的記憶 継続する絆 死別 喪失 悲嘆 精神的健康

1. 研究開始当初の背景

心理臨床における自伝的記憶を巡る研究への関心が昨今高まっている。中でも抑うつと自伝的記憶に関する研究は非常に数多く、主にその想起内容に関する特徴、たとえば概括的であり、特定性・具体性(specificity)に乏しいことなどが明らかになってきている(e.g., Williams et al., 2007)。

近年では、PTSD や複雑性悲嘆(complicated grief)などの問題に対して、自伝的記憶からアプローチしている研究も増加している。これまでの悲嘆と自伝的記憶に関する研究では、抑うつに特徴的な特定性の減少に着目したものが多く、Williams et al.(2007)の提唱したモデルを援用しながらも、悲嘆特有の問題の理解が目指されている。また、故人や喪失した対象が自伝的記憶の中にあり続けることが苦しみを生んでいることも見出され、アタッチメント、アイデンティティ、自伝的記憶を統合した複雑性悲嘆モデルも提唱されている(e.g., Maccallum & Bryant, 2013)。

このような故人へのとらわれから解放され自律的なアイデンティティを再構築することが適応につながるという悲嘆の捉え方に対して、Klass et al.(1996)を中心とした、故人との絆を保ち続けた形で適応的な生活を送ることが可能であるという、「継続する絆」を提唱する立場が近年注目されている。この「継続する絆」という概念に着目すると、これまでの悲嘆と自伝的記憶研究から示されてきた知見やモデルは、複雑性悲嘆や悲嘆の病理を説明する上では意義があるといえるものの、非常に限られたものであると考えられる。

故人との絆に及ぼす地域風土の影響について一般大学生を対象とした調査(e.g., 山中・田上, 2014)では、故人は“傍らに居る存在”、“見守ってくれる存在”、“対話する存在”、“支えとなる存在”であることが対象者の多くにおいて語られており、絆の継続が示唆されている。したがって、上述の悲嘆と自伝的記憶に関する知見とは異なる形での悲嘆過程、すなわち故人や喪失対象を含む自伝的記憶を継続的に想起しながらも、それをうまく機能させたり、あるいは機能を変化させたりすることで適応を取り戻すといった過程が認められる可能性もある。

そこでひとつに有用であると考えられるのが、自伝的記憶の機能に着目したアプローチである。抑うつにおける自伝的記憶の機能の特徴として、自身の支えや行動の指針として働く方向づけ機能と自己の連続性や統合性、アイデンティティに関わる自己機能において特に不全がみられることが示唆されている(e.g., Tagami, 2008)。したがって、継続する絆を自伝的記憶の機能から捉えることは、適応や精神的健康との関連を明らかにする上でも意義あることと考えられる。

2. 研究の目的

- (1) 故人を含む自伝的記憶の内容と特徴について、故人との関係性や喪失後の期間等による違い、及び精神的健康との関連を明らかにする。
- (2) 継続する絆と自伝的記憶の機能との関連を明らかにする。
- (3) 継続する絆における自伝的記憶の機能間の連関と機能の変化を質的に捉える。
- (4) 以上の目的に関する研究結果から構築された、継続する絆、自伝的記憶、適応及び精神的健康との関連性に関する仮説を質問紙調査によって検証する。

3. 研究の方法

- (1) 複雑性悲嘆と自伝的記憶に関する研究の動向 研究1

文献検討により研究の動向を概観・整理し、今後の課題を検討した。

American Psychological Association の PsycINFO により文献の検索を行った。キーワードは、“complicated grief & autobiographical memory”とし、書籍、学位論文、学会発表、英語以外の言語による論文を除く学術雑誌論文(journal articles)を対象とした。またわが国における研究の動向について、国立情報学研究所 CiNii により文献検索を行った。キーワードは“複雑性悲嘆 & 自伝的記憶”、“複雑性悲嘆”とした。

- (2) 対象喪失と精神的健康及び自伝的記憶の関連 研究2

一般成人 400 名(男性 214 名、女性 186 名)を対象に調査を実施した。対象者は株式会社クロス・マーケティングのリサーチ専門データベースのモニター登録者であった。調査は Web 上で行い、実施は同社に委託した。

調査内容は以下の通りであった。

対象者の属性: 性別、年齢、喪失体験の有無を尋ねた。

1つの喪失体験についての属性: 喪失体験の内容、喪失体験の時期、喪失対象の大切さ、喪失の予期、喪失時の苦痛、現在の回復の程度を尋ねた。項目は池内・藤原(2009)に基づき作成した。

喪失対象とのエピソード想起における主観的体験: 高橋(2014)、Takahashi & Shimizu, 2007 より項目を選択した。

想起された喪失対象とのエピソードの具体性: Robinaugh & McNally(2013)に基づき作成した。

喪失対象の無意図的想起について: 頻度、契機、影響を尋ねた。

精神的健康: 日本語版 WHO-5 精神的健康状態表(岩佐他, 2007)を用いた。

本研究は、名古屋市立大学人間文化研究科研究倫理審査委員会の審査・承認を得て実施した。

(3) 故人との継続する絆の適応性における
自伝的記憶のはたらき 研究3

株式会社クロス・マーケティングのサーチ専門データベースにモニターとして登録している一般成人の中から、1,107名を対象に Web 上でスクリーニング調査を実施した。調査の実施は同社に委託した。スクリーニング調査の内容は、対象者の属性(性別,年齢,死別経験の有無),日本語版 WHO-5(岩佐他,2007),本調査への協力意思の有無であった。調査結果,対象者全体の WHO-5 平均得点は 13.59 ± 5.78 であった。精神的健康状態が良好とされるカットオフポイント 13 点以上の者で,死別経験があり,本調査への協力意思がある者は 667 名であった。

スクリーニングされた 667 名から 400 名を本調査の対象とした。Web 調査の実施は株式会社クロス・マーケティングに委託した。

本調査の内容は以下の通りであった。

死別体験についての属性: 故人との続柄等,死別年,故人の生前における大切さと親密さ,死別の予期,死別時の苦痛,現在の回復の程度を尋ねた。池内・藤原(2009)に基づき項目を作成した。

故人との継続する絆: 中里他(2008)による日本語版 Continuing Bonds Scale (以下 CBS)を用いた。

故人とのエピソードの想起に伴う主観的特性: 関口(2011)による主観的特性質問紙より項目の一部を選択した。

死別反応: 中里(2006)によって作成された死別反応尺度を用いた。

本研究は名古屋市立大学人間文化研究科研究倫理審査委員会の審査・承認を得て実施した。

(4) 死別経験と故人との継続する絆,及び精神的健康状態に関する調査 研究4

40 歳以上の一般成人で,株式会社クロス・マーケティングのサーチ専門データベースのモニター登録者 10,311 名を対象に Web 調査を実施した。調査実施は同社に委託した。

調査内容は以下の通りであった。

対象者の属性: 性別,年齢,同居家族を尋ねた。

日本語版 WHO-5(岩佐他,2007)

死別経験の有無: 無い・答えたくないと回答した者はこの時点で調査を終了してもらった。

死別体験についての属性: 死別経験が有る者については,ひとつの死別体験について,故人の続柄,死別年,生前の故人との関係性,現在の故人への思い,死別の突然性,死別時の苦痛,現在の回復の程度を尋ねた。項目の一部は池内・藤原(2009)に基づき作成した。

日本語版 CBS(中里他,2008)

記憶に関する次の調査への協力意思の有無

本研究は名古屋市立大学人間文化研究科研究倫理審査委員会の審査・承認を得て実施した。

(5) 故人との継続する絆と故人に関する無意図的想起との関連 研究5

研究4の調査において,記憶に関する次の調査への協力意思が有ると回答した者の中から,親との死別者 200 名と配偶者との死別者 200 名を対象とし,Web 調査を実施した。調査の実施は株式会社クロス・マーケティングに委託した。

調査内容は,故人の無意図的想起の頻度,繰り返し無意図的に想起されるエピソードの有無,無意図的に想起されるエピソードの内容,そのエピソードの経験時期,想起時の感情,想起時の主観的体験であった。想起時の主観的体験については,関口(2011),高橋(2014),Takahashi & Shimizu(2007)より項目を選択した。

本研究は名古屋市立大学人間文化研究科研究倫理審査委員会の審査・承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 複雑性悲嘆と自伝的記憶に関する研究の動向 研究1

PsycINFO における検索の結果,抽出された研究は 13 編であった。CiNii における検索の結果,“悲嘆 & 自伝的記憶”では 0 編であり,“複雑性悲嘆”のみで 27 編が抽出された。

海外における研究の動向については,認知行動療法の治療的枠組みと効果に関する研究と自伝的記憶の特性に着目した研究の大きく 2 つの流れに分類された。

わが国では悲嘆と自伝的記憶に関する研究はみられず,複雑性悲嘆に関する研究自体も 27 編と多くはなかった。最も多く対象とされていたテーマは,東日本大震災や阪神淡路大震災の影響など,災害と複雑性悲嘆に関するものであった。

全般的に研究数は多くはなく,まだ始まったばかりの研究領域であることが明らかとなった。提唱されているモデルに関しても検証はこれからであり,MacCallum & Bryant(2013)の指摘するように,病的ではない悲嘆・健常者を対象とした検討も含め,実証研究を積み重ねていくことの必要性が示されたといえる。また,自伝的記憶からの複雑性悲嘆の理解については,その内容や特定性など一側面を捉えているにすぎない現状が示された。今後は内容面だけではなく機能にも着目した研究と理論化も必要であると考えられる。さらに,悲嘆に関しては,故人とのとらわれから解放され自律的なアイデンティティを再構築することが適応につながるという捉え方とは異なる,継続する絆という観点も考慮しつつ,悲嘆と自伝的記憶のありようを検討していくことの必要性が感じられた。

(2) 対象喪失と精神的健康及び自伝的記憶の関連 研究2

有効回答 397 について分析を行った。

喪失体験についての記述統計

喪失体験の内容を図 1 に示した。

喪失体験からの平均経過年は 15.71 ± 15.69 年(範囲 0-77 年)であった。喪失対象の大切さの平均は 85.64 ± 17.35 (範囲 5~100) であった。喪失の予期は、「ある程度予想していた」168 (42.32%)、「全く予想していなかった」120(30.23%)の順に多かった。喪失体験時の苦痛は、「非常に強く感じた」が 197 (49.62%)と最も多く、平均 5.30 ± 0.86 であった。現在の回復の程度は、「完全に回復している」が 106(26.70%)と最も多く、平均 4.37 ± 1.42 であった。

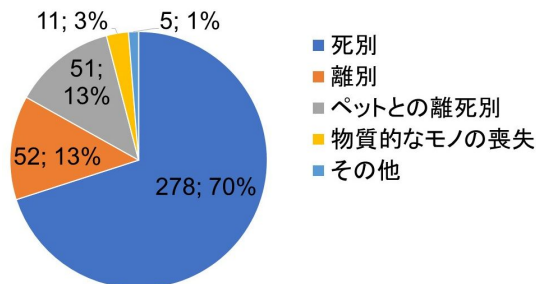


図 1 喪失体験の内容

想起の主観的体験に喪失体験及び精神的健康状態が及ぼす影響

喪失体験全般について($N=397$)と死別体験に限定した場合について($N=278$)、想起の主観的体験に関する因子を従属変数とし、独立変数としてデモグラフィック要因を Step 1、喪失体験からの経過年を Step 2、喪失体験の属性を Step 3、現在の状態を Step 4 として投入した階層的重回帰分析を行った。

喪失体験全般で分析した場合、現在の状態(現在の回復の程度と精神的健康状態)を投入した場合に説明率の有意な増分が認められたのは「反すう頻度」に対してのみであった($R^2=.02, p<.01$)。一方、死別体験に限定した分析では、現在の状態を投入すると、「明瞭度」($R^2=.03, p<.05$)、「色の含有度」($R^2=.04, p<.01$)、「視覚的詳細」($R^2=.03, p<.05$)、「反すう頻度」($R^2=.03, p<.01$)、「関与度」($R^2=.03, p<.01$)において説明率の有意な増分が認められた。

想起されたエピソードの具体性と喪失体験及び精神的健康との関連

同様に、喪失体験全般と死別体験に限定した分析を行った。喪失体験全般においては、エピソードの具体性と対象者の属性、喪失体験の属性、精神的健康との間に有意な関連は認められなかった。死別体験に限定して分析した場合においては、具体的エピソードを想起した者は死別体験時の年齢が低い傾向にあることが示された($p<.10$)。

喪失対象の無意図的想起について

WHO-5のカットオフポイント13点で精神的健康良好群($n=235$)と不良群($n=162$)に分け、無意図的想起頻度を比較した結果、精神的健康不良群の想起頻度が有意に高いことが示された($t(395)=2.53, p<.05$)。

無意図的想起の契機について、自由記述内容を類似性に基づき分類した結果、「喪失対象と似ている人・動物を見たとき」(29)、「就寝時」(26)、「喪失対象に関連するテレビ・ニュース等を見聞きしたとき」(24)の順に多かった。

無意図的想起の影響について、自由記述内容を類似性に基づき分類したところ、「懐かしい気持ちになる」(66)、「悲しい気持ちになる」(21)、「さみしい気持ちになる」(20)、「後悔等」(18)、「行動指針・教訓等になる」(17)の順に多かった。

結果のまとめ

広く喪失体験をまとめて分析した場合と、死別体験に限定して分析した場合では、喪失対象とのエピソードの想起や、想起と精神的健康との関連は異なることが示唆された。今後は死別体験に限定した研究を行うことで、悲嘆と自伝的記憶との関連がより明確になると考えられる。

(3) 故人との継続する絆の適応性における自伝的記憶のはたらき 研究3

故人との継続する絆に死別体験が及ぼす影響

CBS 得点に対象者の属性及び死別体験についての属性が及ぼす影響について、重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。結果、男性<女性であり($\beta=.17, p<.001$)、故人との生前の親密さ及び喪失時の苦痛の正の影響($\beta=.21, p<.001$; $\beta=.30, p<.001$)、回復の程度の負の影響($\beta=-.23, p<.001$)が認められた($R^2=.29, p<.001$)。

継続する絆と死別反応との関連

CBS 得点と死別反応尺度の「悲哀感と思慕」「イメージと思考の再体験」との間には、有意な正の相関が認められた($r=.53, p<.001$; $r=.39, p<.001$)。

故人との継続する絆の変化についての横断的検討

死別からの経過年を、1 年未満($n=29$)、1 年以上 3 年未満($n=46$)、3 年以上 5 年未満($n=34$)、5 年以上 10 年未満($n=83$)、10 年以上 20 年未満($n=103$)、20 年以上($n=95$)に群分けをした。CBS 得点について群間比較したところ(図 2 参照)、経過年の有意な効果が認められた($F(5,384)=2.33, p<.05$)。CBS 得点が最も高かった“1 年以上 3 年未満”と最も低かった“5 年以上 10 年未満”及び次に低かった“10 年以上 20 年未満”との間に差がある傾向が示された($p<.10$)。

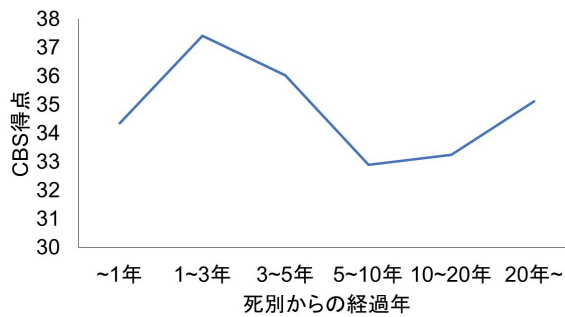


図2 故人との継続する絆の時間的変化

故人のエピソードの想起に伴う主観的特性に対象者及び死別体験の属性が及ぼす影響

想起時の状態・感情を従属変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。想起の主観的特性の「知覚的鮮明さ」「言語的詳細さ」「再体験感」「感情強度」には死別時の苦痛の正の影響が($\beta = .12 \sim .17, p_s < .05$), 現在の回復の程度の負の影響がそれぞれ認められた($\beta = -.17 \sim -.23, p_s < .01$)。加えて、「知覚的鮮明さ」と「感情強度」には故人との親密さの正の影響が認められた($\beta = .14, p < .05$; $\beta = .11, p < .05$)。「再体験感」には故人の大切さの正の影響が認められ($\beta = .16, p < .01$), 「言語的詳細さ」は配偶者・パートナー等との死別者 > 祖父母との死別者であった($\beta = .12, p < .05$)。「ポジティブ感情」には死別時の苦痛の正の影響が認められ($\beta = .14, p < .05$), 祖父母との死別者 > 親との死別者であった($\beta = -.11, p < .05$)。「ネガティブ感情」については、親との死別者 > 祖父母との死別者であり($\beta = .12, p < .05$), 現在の回復の程度の負の影響が認められた($\beta = -.14, p < .05$)。

想起の視点間で死別体験変数を比較した結果、いずれも有意差は認められなかった。

故人との継続する絆と想起の主観的特性との関連

従属変数を CBS 得点, 独立変数を想起時の状態・感情の各因子とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行った結果、「知覚的鮮明さ」($\beta = .38, p < .001$), 「再体験感」($\beta = .17, p < .05$), 「ポジティブ感情」($\beta = .13, p < .01$)の正の影響が有意であった。想起の視点と CBS とに有意な関連は認められなかった。

結果のまとめ

生前の故人とより親密な関係であり、喪失時の苦痛が強い者ほど故人との絆が強いことが示されたことから、生前の故人との愛着関係が死別後の絆に反映されることが示唆される。また、故人との絆は死別反応と正の相関があり、時間的変化に関しては直線関係ではないことが示唆されたことから、今回対象とした精神的健康状態が良好な者においては、必ずしも故人との絆が死別への適応を高めるわけではない可能性が示唆される。

絆における記憶のはたらきに関しては、故人との絆はポジティブな感情を伴う想起と関連することが示唆されたが、故人の続柄などの関係性によって絆における記憶のはたらきは異なると考えられる。今後は、故人との関係性別に検討を行うことが必要であると考えられる。

(4) 死別経験と故人との継続する絆、及び精神的健康状態に関する調査 研究 4

対象者の性別は男性 6,257 名, 女性 4,054 名, 平均年齢は 60.82 ± 10.74 (範囲 40-79) 歳であった。家族については、配偶者・パートナーとの同居が 7,410 名(71.9%)と最も多く、次いで子どもとの同居が多かった(3,557 名, 34.5%)。WHO-5 平均得点は 13.66 ± 5.92 であった。大切な人との死別経験がある者 8,020 名(77.9%), ない者 1,894 名(18.4%), 答えたくない者 397 名(3.9%)であった。

死別経験があると回答した者の故人の続柄等は図3の通りである。死別からの平均経過年数は 15.46 ± 14.67 年であった。生前の故人との関係の良好さは 83.80 ± 22.74 , 親密さは 77.75 ± 26.41 , 大切さは 85.87 ± 22.57 であった。現在、故人に感じる親密さは 78.61 ± 26.74 , 大切さは 83.86 ± 23.97 であった。死別が「突然であった」が 2,096 名(26.1%), 「突然ではなかった」(22.2%)であった。死別時の苦痛は 5.03 ± 1.32 , 現在の回復の程度は 4.80 ± 1.27 であった。CBS 得点は 33.07 ± 8.58 であった。

変数間の関連については現在分析を行っているところである。

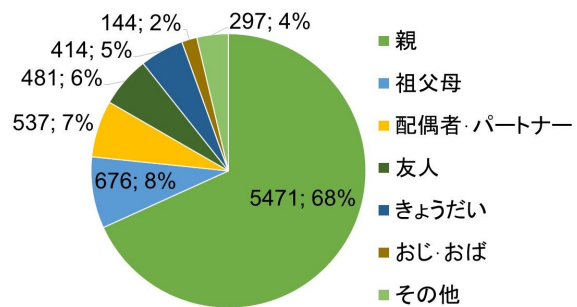


図3 故人の続柄等

(5) 故人との継続する絆と故人に関する無意図的想起との関連 研究 5

対象者の性別は男性 152 名, 女性 248 名であった。平均年齢は 63.62 ± 10.39 歳(範囲 40-79 歳)であった。WHO-5 の平均得点は 14.26 ± 5.90 であった。

また、故人の無意図的想起の頻度の平均は 3.43 ± 1.01 であった。

この他の記述統計及び変数間の関連については、現在分析を行っているところである。

以上のほか、故人との継続する絆における自伝的記憶の機能に関する質的分析についても、継続して取り組んでいく予定である。

<引用文献>

- 池内 裕美・藤原 武弘 (2009). 喪失からの心理的回復過程 社会心理学研究, 24, 169-178.
- 岩佐 一他 (2007). 日本語版「WHO-5 精神的健康状態表」の信頼性ならびに妥当性 地域高齢者を対象とした検討 厚生の指標, 54, 48-55.
- Klass, D., et al. (1996). *Continuing bonds: New understandings of grief*. New York: Taylor & Francis.
- Maccallum, F., & Bryant, R. A. (2013). A cognitive attachment model of prolonged grief: Integrating attachments, memory, and identity. *Clinical Psychology Review*, 33, 713-727.
- 中里 和弘 (2006). 青年期における祖父母との死別に関する研究(第1報) 祖父母の死に対する認識と死別反応についての検討 生老病死の行動科学, 11, 11-20.
- 中里 和弘他 (2008). 日本語版 Continuing Bonds Scale (「故人との絆の継続」評価尺度)の作成 日本心理学会第72回大会発表論文集, 376.
- Robinaugh, D. J., & McNally, R. J. (2013). Remembering the past and envisioning the future in bereaved adults with and without complicated grief. *Clinical Psychological Science*, 1, 290-300.
- 関口 理久子 (2011). 自伝的記憶想起に伴う現象学的・主観的特性について 自伝的エピソード記憶の主観的特性質問紙を用いた検討 関西大学心理学研究, 2, 7-17.
- Tagami, K. (2008). The functions of autobiographical memory and depression. The 29th International Congress of Psychology, Berlin.
- 高橋 雅延 (2014). 記憶特性質問紙による不随意記憶の検討 聖心女子大学論叢, 123, 112-80.
- Takahashi, M., & Shimizu, H. (2007). Do you remember the day of your graduation ceremony from junior high school?: A factor structure of the Memory Characteristics Questionnaire. *Japanese Psychological Research*, 49, 275-281.
- Williams, J. M. G., et al. (2007). Autobiographical memory specificity and emotional disorder. *Psychological Bulletin*, 133, 122-148.
- 山中 亮・田上 恭子 (2014). 青年期における故人との絆のあり方 日本心理学会第78回大会発表, 京都市.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計4件)

- 田上 恭子, 山中 亮, 喪失対象とのエピソードの想起における主観的体験 対象喪失と精神的健康及び自伝的記憶の関連 (2), 日本心理学会第81回大会, 2017年
- 山中 亮, 田上 恭子, 喪失体験と精神的健康及び記憶の具体性との関連 対象喪失と精神的健康及び自伝的記憶の関連 (1), 日本心理学会第81回大会, 2017年
- 田上 恭子, 山中 亮, 喪失対象の無意図的想起に関する探索的研究, 日本応用心理学会第84回大会, 2017年
- 田上 恭子, 山中 亮, 複雑性悲嘆と自伝的記憶に関する研究の動向, 2014 Asian Society of Human Services Congress in Sapporo, 2014年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田上 恭子(TAGAMI, Kyoko)
愛知県立大学・看護学部・准教授
研究者番号: 80361004

(2) 研究分担者

山中 亮(YAMANAKA, Akira)
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号: 20337207